

られる。と彼は口だけで笑いながら言っていたがそんなのは嘘だろうと私は長い前髪で笑わない

こをり

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君にあげられる愛は小指の先、いや蟻の頭くらいならわけられる。と彼は口だけで笑いながら言つていたがそんなのは嘘だらうと私は長い前髪で笑わない目を隠した。きっと、いや、絶対気づいているだろうけど

【ZPDFアード】

Z65290

【作者名】

じわり

【あらすじ】

過去に未練タラタラの女の子とその女の子を憎んでいるがほんのちょっとだけ愛してしまつている男の子の話。お互い選択肢を見誤つた苛立ちをぶつけている。（まるで子供のケンカのよう）

「ン」

ノックの音がやけに大きく聞える

入ってきたのは好奇心で殺されるような男

「こんなところに来る物好きがまだいたなんて」

「いや悪い?」

「おや、皮肉だつたかな?」

「君が皮肉を言わない日なんて無いだろ」

「相変わらずだね」

「君もね」

「ううとこりを私は気にしている

他の奴等なら気分を害してやつたと帰つてしまつからだ
なぜだかはもううん分かつてゐる。が、直さない（直そうとも思わな
い）

「君は暇なのかい?」

「見て分からない?」

「おや?言つよくなつたね」

「おかげさまで」

「そう拗ねるな。この私の宝物の飴玉でもやつつか?」

「遠慮させていただきます」

「冷たいねえ」

「君の口からそんな言葉が出るなんて」

「どう言つ意味だい?」

「そーゆー意味です」

淡々として脈絡の無い話題
いつもの事

「友達は出来たのかな?」
「ううん。相変わらずだよ」
「相変わらずか」
「分かってる?」
「分かってる」
「君のせいでも友達が出来ないって事」
「責任展開はやめたまえ」
「今さっき分かってるって言つたじやないか」
「ん? そうだったかな?」
「うん。 そうだった」
「細かいね」
「君に言われちゃおしまいだ」
「そんなことは無いもつと胸を張りたまえ」
「よしなよ。 まな板だつて事がばれる」
「お心使いありがとう。 しね」
「レディーがそんなこと言つちゃ駄目だよ」
「それはそれは失礼しました。 以後気をつけますので」
「君は役者になれないね」
「残念だ」
「残念なの?」
「もちろん。 1つの将来へと伸びる道が閉ざされたのだからね」
「君の将来は決まってるだろ」
「そうだったかな?」
「とほける事だけはハリウッドスター級だね」
「お褒めに預かり光栄ですわ」
「へたくそ」

「知ってる」

お互いの目は見ない

彼の目は真直ぐで純粋で綺麗で好奇心旺盛で大きくて、嘘を赦さないような目だつた

気づいたかな？そう、過去形なんだよ

私と出会ってしまったせいで歪んで掠れて嘘や侮辱を気にしない目になつた

好奇心旺盛なのはかわらないけど

「何を考えてるのか知らないけど、そんな顔もできるんだ」

「百面相なら得意だよ」

「嘘だ」

うん、嘘だよ

でもその言葉は心で呟いた

前の君ならそのまま鵜呑みにして後から嘘吐き、と笑いながら指摘しちだらうに

今では私の目を射抜くように見て断言するよつになつたのだね

こんなふうにさせた張本人なのにな

「君は変わったね」

「・・・・ふざけてるの？」

頼むからその目を伏させてくれ

瞼と言う薄い壁で私を視界から消してくれ

罪悪感、後悔、懺悔、どれだけ許しを請うても今の君では無意味で嘘になるのだろう

謝る気など不毛もないけど

「こんな俺は嫌い？」

「好きだよ」

「君は本当に大根役者だ」

「それで結構、君も演じてみればいい。難しさが分かるよ」

「まさか俺はスカウトが来るくらい上手に演技きてやるさ」

「その自信はどこから?」

「君から」

聞くんじゃなかつた

小さく舌打ちをしてから笑つてやつたら興味が失せたかのよつて田
を伏せた

君とであつて1年。180 変わつた君。10 だけ甘くなつた私。

「君にスカウトがくるなら私には宝塚からかな?」

「今日は4月1日じゃないよね?」

「馬鹿にしないでもらいたいね」

「そんなつもりじゃないよ、ただの確認」

「それはよかつた、安心したよ」

馬鹿みたいなやり取り

私はこの時間を苦痛と思つのこの時間が無くなればきっと、

「そろそろ帰るうかな?」

「おや? 今日は早いね」

「うん、君が凄く帰つて欲しそうな顔をしていたから

「・・・ そうかい?」

「間があつた」

「呼吸をしていたんだ、そんな些細な時間すら『えてくれないのか
い?』

「 もう一度言つたが、今日の君はふざけてるの? 」

「 まさか 」

「『君は変わつたね?』変えたのはどうのどこつだ
「変わる選択肢はやつた、選んだのは君だ」

「 初めから一つしかなかつたのに? 」

「 〇もあつただろうに 」

口を紡いだ君は私を軽蔑したかのよくな目で睨みつけた
前なら困つたように笑つて答えを曖昧にしてたのにね
口を薄き開き言葉を発する前に

「 私は前の君も好きだつたよ 」

「 僕は今でも君が嫌いだよ 」

「 ・・・笑つて言つ事じやないだん 」

「 間があつた 」

「 瞬きをしていたんだ、そんな些細な時間すら『えてくれないのか
い? 』

「 今日の君もむかつく 」

「 いつもの事だらう? それともこの一年でよつもく『えづけたのかな
? 』

「 きつと出会つた瞬間僕は無意識に『気がついていたよ 』

「 ならその時が引き際だつたんだ 」

「 そう、だつたのかな? 」

「 そろそろ帰るんだる? 送つていて欲しいのかい? 』

「 君に無駄な労働をさせられない 」

「 優しさだけは昔から変わらないな 」

「 君がそつなつたからだろ 」

吐き捨てるかのよつて早口で言つてから力を込めてドアを閉めてい
つた

咲と輝く。咲ば、咲

「私は君に恋をしていたんだよ、知つていたかい？」

縛り付けたくて、離れて行つて欲しくなくて

ああ、こんな事ではへきしやなかつた
二二二二う愚云のムモジハ、殴り二二二二
こんな結果になると分が

そつと、彼が出て行つたドアを見る

おへじ2
「3田したら嫌々顔を出すのだろう

卷之二

それは誰に対する謝罪か。

優しかった君に、逢いたい（私が言える立場じゃないのにね）
とくん、中で動いた気がした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6529o/>

君にあげられる愛は小指の先、いや蟻の頭くらいならわけられる。と彼は口だ

2010年11月2日01時49分発行